

<全体分析>

試験時間 120 分

解答形式

I、II、IIIいずれも論述式

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)

難易 (易化・やや易化・変化なし・**やや難化**・難化)

出題の特徴

400字3題の出題は不動である。2022年度のIIIは実質3問に分割されていたが、2023年度は400字1問に戻っている。Iは欧州の中世・近世史、IIは欧米の近世・近代・現代史、IIIは近代・現代のアジア史の枠組みが定番となっている。資料の読解を含む問題が多く、2023年度はIIで地図の理解が、IIIでは史料の読解が求められた。

その他トピックス

第二次世界大戦後のアフリカの地図から、国名を指摘し独立の経緯を問う問題が出題された。地図から国名を指摘し、独立の経緯を問う問題は、その出題形式もさることながら、時代・地域ともに過去に出題実績がない新たな地域・テーマの出題となった。なお「2023年度 一橋大入試オープン」のIでは、本問Iが問うている英仏の対立や、「二つの国家間の戦争と捉えることが必ずしも適切ではない」とする主旨を、また2022年度冬期講習「一橋大世界史」の第5講3では、本問IIIの下線部で指摘することが求められている「歴史的経緯」を出題した。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	論述	英仏百年戦争とフランス王国の変化	百年戦争が「二つの国家間の戦争と捉えることが必ずしも適切ではない」ことを考察させる問題。ブルゴーニュ公など教科書であまり扱われていない事項を使う点では難問と言えるが、基礎的事項からでも十分に論は組み立てられるはずである。2014年度のIでは百年戦争期のワット＝タイラーの乱を題材にイギリスの国家形成を考察させており、その意味では対をなす問題と言える。	やや難
II	論述	1970年代以降のアフリカの新興国	地図から、モザンビークとジンバブエを判断し、その独立の経緯を書かせる問題。地図から国名を判断させる点、今まで第二次世界大戦後のアフリカ史が出題された実績がないことなどから大方の受験生は驚いたはずである。解答はアフリカ統一機構の設立から始め、モザンビークについては、ポルトガル革命に言及する。ジンバブエについては国連制裁や現地の人々の武力闘争などに言及する。	難
III	論述	中国の半植民地化と孫文＝ヨッフエ会談	孫文＝ヨッフエ会談を知らなくても、史料の内容と年号からおおよその判断はつくだろう。下線部の内容についてはなるべく具体的に列挙しておきたい。IIで虚を突かれた受験生は、ここで確実に得点を確保したい。	やや難

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

史料・資料問題の形式が定着しつつある。やはり日頃から史料・資料問題に慣れておく必要はあるだろう。今回IIでは地図の判読が答案作成の重要なカギとなった。難問が出題されることも多いが、細かい知識に偏るのでなく、基礎となる歴史理解の徹底につとめたい。文化史・社会史を含め基本となる通史はなるべく早く仕上げよう。そのうえで過去問研究を周到に行い、繰り返されるテーマに共通する事項・知識を確実なものとし、覚えるだけでなく、思考の材料として使えるようにしておきたい。